

唐宋伝奇から元雜劇にみる妓女像の変化

福 永 美 佳

一 はじめに

妓女との交流の様子は各ジャンルの文学作品に取り上げられ、詩詞、戯曲、小説など多数伝わっている。しかし、大木康氏によれば、それらは個別に検討されるばかりで遊里という場全体からみれば断片的なものであり、中国文学史における遊里文学の全体像を次のように論じている。

話をもとに戻せば、妓女に人格を認めようとした文学作品は、実は必ずしもこの「三言」が最初というわけではない。古く、唐代伝奇の「李娃伝」は、金の切れ目が縁の切れ目で、……（中略）唐代伝奇以外にも、元の雜劇「救風塵」や「販茶船」などは、士人との愛をつらぬこうとする妓女が登場し、曲折を経ながらも、最後に出世した男と結ばれる話、として要約することがで

き、これらも同一系列の作品と見做すことができる。「李娃伝」や元雜劇などにあつては、最後に男が科挙に合格するという、人生最大の切り札が用意されていて、どんな女と結婚しても、出世すれば結果は同じ、という見方に立っているのであつて、その点が、「三言」の杜十娘や売油郎のように、悲劇、もしくはハッピーエンドにしても官僚などにならない終り方をしていものに比べて、安易といえば安易にちがいないが、それにしても、妓女を描いた作品において、どちらかといえば、伝統的な文学観からは、俗文学として貶められて来た、小説や戯曲の方に、むしろ妓女の人格を認め、愛を貫き通そうとする姿を描いた作品が多くあることは、注意されてよいだろう¹⁾。

大木氏は、通俗文芸において「妓女の人格を認め、愛を貫き通そうとする姿を描いた作品が多くある」ことを評価している。そして唐代伝奇から続くこの流れの中に元雜劇があり、明代の短編白話小説があることを指摘する。

本稿では、このような系譜の存在について賛同しつつも、妓女像に変化が生じていることを論じてみたい。

二 唐宋伝奇において

唐代では、伝奇の流行とともに、散文体によって恋愛や夫婦間の愛情が描かれるようになる。『太平広記』巻四八四、雜伝記一に収められる白行簡（七七六・八二六）の「李娃伝」もその一つである。

これは科挙を受験するために上京した名家出身の青年が、一旦は長安の美妓李娃の色香に迷い、金を巻き上げられた揚句、物乞いに身を落とすが、その後改心した李娃の献身的な支えによって立ち直り、官職を得る話である。最終的に李娃は男の出世に貢献したことで妻として迎え入れられるが、その前に

男に対して次のような話をする。

將之官、娃謂生曰、今之復子本軀、某不相負也。願以殘年、歸養老姥。君當結媛鼎族、以奉蒸嘗。中外婚媾、無自黷也。勉思自愛。某從此去矣。生泣曰、子若棄我、當自頸以就死。娃固辭不從。

將に官に之かんとして、娃生に謂ひて曰く、「今之れ子を本軀に復す、某は相負かざるなり。願わくは殘年を以て、老姥を歸養せん。君當に媛に鼎族に結び、以て蒸嘗に奉ずべし。中外の婚媾、自ら黷すこと無かれ。勉思自愛せよ。某此従り去らん」と。生泣きて曰く、「子若し我を棄つれば、當に自頸して以て死に就くべし」と。娃固辭して従はず²。

このように李娃は男の科挙及第を見届けると、自分も再びもとの妓楼に戻って養母と過ごすといひ、男には家柄の良い娘と結婚し、先祖を祭ることを勧めている³。同じような例として、もう一つ『太平広

記』卷四八七、雜伝記四のなから蔣防作「霍小玉伝」を挙げる事ができる。

玉謂生曰、以君才地名声、人多景慕、願結婚媾、固亦衆矣。況堂室有嚴親、室無家婦。君之此去、必就佳姻。盟約之言、徒虚語耳。然妾有短願、欲輒指陳、永委君心。復能聽否。生驚怪曰、有何罪過、忽発此辭。試説所言。必当敬奉。玉曰、妾年始十八、君纔二十有二、迨君壯室之秋、猶有八歲。一生歡愛、願畢此期。然後妙選高門、以諧秦晉、亦未爲晚。妾便捨棄人事、剪髮披緇、夙昔之願、於此足矣。生且媿且感、不覺涕流。

玉生に謂ひて曰く、「君の才地名声を以て、人多く景慕し、婚媾を結ばんことを願ふは、固より亦た衆し。況んや堂に嚴親有り、室に家婦無し。君の此を去る、必ず佳姻に就かん。盟約の言は、徒だ虚語なるのみ。然して妾に短願有り、輒ち指陳し、永く君の心に委せんと欲す。復た能く聴くや否や」と。生驚怪して曰く、「何の罪過有

りて、忽ち此の辭を発するや。試みに言はんとする所を説け。必ず当に敬奉すべし」と。玉曰く、「妾は年始めて十八、君は才かに二十有二、君の壯室の秋に迨ぶに猶ほ八歳有り。一生の歡愛、願はくは此の期に畢へん。然る後高門を妙選し、以て秦晉を諧ふるも、亦た未だ晩しと爲さず。妾便ち人事を捨棄し、髮を剪り緇を披れば、夙昔の願、此に於て足らん」と。生は且つ媿ぢ且つ感じ、覺えず涕流る⁴。

小玉もまた男のために自分が身を引くので、名家から妻を迎えるように勧める。だが小玉の本心は別にあつたようで、その後亡霊となつて一生男に付きまとうのである。とはいえ、ここに挙げた李娃と小玉に共通しているのは、彼女たちが妓女という身分に強く引け目を感じて、良家出身の女性との縁談を男に勧めている点である。

このような妓女は宋代伝奇、秦醇作「譚意歌」にも登場する。ここでは子どもを身籠つた意歌という名の妓女が、男を受験に送り出す際に次のように述

べる。

張登途、意把臂囑曰「子本名家、我乃娼類、以賤偶貴、誠非佳婚。況室無主祭之婦、堂有垂白之親、今之分袂、決無後期」。張曰「盟誓之言、皎如日月。苟或背此、神明非欺」⁶。

張途に登らんとして、意臂を把み囑みて曰く「子本より名家なり、我乃ち娼類なり、賤を以て貴に偶すは、誠に佳婚に非ず。況んや室に主祭の婦無く、堂に垂白の親有らば、今之れ袂を分ち、決して後に期ふこと無かれ」と。張曰く「盟誓の言、皎きこと日月の如し。苟しくも或いは此に背けども、神明に欺くこと非ず」と。

意歌もまた妓女であったことを理由に別れを口に、良家出身の娘を妻にして先祖を祭るようと男に持ちかけている。ここに挙げた意歌の言葉は、李娃や小玉と非常に似ている⁷。これらの作品には、身分が縁談の障害になると男性に訴える妓女が描かれ

ているのである。

三 元雜劇において

ところが、元雜劇ではそうではない。例えば、先ほど取り上げた唐代伝奇「李娃伝」を、元雜劇に改作したことで知られる石君宝作「李亜仙花酒曲江池」(以下、「曲江池」と略す)では、第一折で李娃が男に以下のように述べる。

【賺煞】(末云)着多少錢與你母親。(旦唱)嗔既然結姻縁、又何須置酒張筵。怕不要來俺娘親怎過遣。覩了他那風流人物呵、怕不待將他來恕免、又恐怕將人輕賤。我則索你個正腔錢、省了你那買間錢⁸。

【賺煞】(鄭元和がいう)多めにお母さんに差し上げましょう。「李亜が歌う」私たちはもう結婚したので、宴会をする必要はありません。しかし金が必要ないとすれば母はどうやって生活できるでしょう。母はあの人の風流なさまを見れば、(また

客として迎え）赦してくれるでしょうが、また彼を軽んじ素寒貧にさせるのではないかと心配します。私はあなたの身請けの金は要りませんが、遊ぶ金は切り詰めます。

唐代伝奇の李娃と違い、「曲江池」の李亜は書生を裏切らない。二人の仲を引き裂く元凶は母親であり、李亜は男が出世しても身を引くとは言わないのである。

それでは他の元雜劇ではどうだろうか。遊郭に精通し、妓女と仲がよかったことで知られる作家、関漢卿には、妓女との交流を描いた作品が三つ伝わっている。その一つ、「金線池」の第一折には、【端正好】「想那¹⁰知今曉古人家女、都待與秀才每爲夫婦」（思うに古今に通曉している女は、みな秀才と夫婦になりたいのです）という歌詞が置かれ、冒頭から書生との結婚を強く望む妓女の物語であることが示される。また「謝天香」の第二折にも【二煞】幾時得兒女成雙。止望嫁杭州柳永、做個自在人」（いつになったら私たちは一緒になれるのかしら。杭州の柳永に

嫁ぎ、気ままな人になりたい）という発言があることから分かるように、身分の差が障害として意識されていない。

そしてもう一つ、仲間の妓女を知恵と色仕掛けによって窮地から救い出す「救風塵」がある。この作品には、二人の妓女が登場する。一人は貧乏な書生を捨て、金持ちと結婚したものの、家庭内暴力に苦しみ、離婚し、元の鞘に収まる宋引章である。もう一人は、彼女を苦しみから助け出す趙盼児であり、こちらが本作の主人公である。注目したいのは、趙盼児が妓女でありながら、妓女の縁談に否定的であるという点である。その理由について、第一折で、彼女は【那陀令】待妝一個老寔、學三從四德、爭奈是匪妓、都三心二意」（堅気を装って、三従四徳をまねたって、残念ながら妓女というのは、みな浮気者なのです）といい、身分の差ではなく、妓女の性質に問題があるからだと述べる。したがって、「救風塵」は、縁談を扱っているが、妓女の愛情ではなく打算や本音の部分に踏み込んでおり、ここまでに挙げた作品とは一線を画す。

では、それ以外の作家による作品についてはどうだろうか。例えば、張寿卿作「紅梨花」の第二折には、正旦謝金蓮が秀才趙汝州を想って「【梁州】俺俺俺辦着個十分志誠、敢敢敢成合一世的前程」（私は十分な真心を備えて、おそらくは結婚を成就しましょう）という歌詞があり、馬致遠「青衫泪」の第二折には、正旦裴興奴が江州司馬として出発する白居易に向かつて「妾之賤軀、得事君子、誓托終身」（卑しい私であります、立派な方にお仕えし、終生を託することをお誓いしました）というせりふがある。

つまり、元雜劇に登場する妓女は、唐宋伝奇に登場する妓女とは異なり、階級差を自覚しているにもかかわらず、それを理由に身を引こうとはせず、嫁ぐ意思を周囲に公言する。妓女による自由な発言が可能となった背景には、元雜劇の受容層が庶民層であったということが関わっている。ただし、こうした妓女の態度や発言は、唐代伝奇の妓女とは変化が生じているかに見えるが、唐代伝奇「李娃伝」から続く「士人との愛をつらぬこうとする妓女が登場し、曲折を経ながらも、最後に出世した男と結ばれ

る話」¹¹という流れそのものは、ここに受け継がれていると言えよう。

¹大木康「馮夢龍と妓女」（『広島大学文学部紀要』第四八輯、一九八九年所収）参照。

²「李娃伝」（李昉撰『太平廣記』卷四八四「雜伝記一」、新興書局、一九六九年）、一八六一頁の記述。

³岡本不二明「唐代傳奇「李娃傳」の読み方」（『未名』一八号、二〇〇〇年所収）参照。これについて岡本不二明氏も、か弱い女の身でわざわざ一月余りもかかって男を見送るのは不自然であり、「口では身を引くと言いつつ本當はどこまでもついて行きたい女の気持ちをそれとなく代辯している」と解釈している。

⁴「霍小玉伝」は注二、『太平廣記』卷四八七、雜伝記四、一八七〇頁の記述。

⁵岡本不二明『唐宋の小説と社会』（汲古書院、二〇〇三年）第二部「志怪小説と宋代社会」第六章「唐宋小説論覚え書——まとめに代えて——」、三四八、

三六八頁参照。

⁶ 劉斧撰『青瑣高議別集』卷二「譚意歌」(『青瑣高議』、中国古典出版社、一九五九年所収) 一九五頁の記述。

⁷ 魯迅は『中国小説史略』のなかで「譚意歌」について「霍小玉伝」を模倣して団円で締めくくったものと指摘する。この点は注五に挙げた岡本不二明氏(三二六頁)によっても指摘される。

⁸ この作品は明代に『綉繻記』に改編されたことでも知られている。金文京「小説『李娃伝』の劇化——『曲江池』と『綉繻記』」(『中国文学報』三二一、一九八〇年所収)に詳しい。

⁹ 顧曲齋本「曲江池」は、注六『古本戯曲叢刊』四集(商務印書館、一九五八年所収)を使用した。「曲江池」は『元曲選』(中華書局、一九五九年所収)に収録される。『元曲選』にある歌詞は、「(末云)小生多備些錢、送與媽媽、必然容允。(正旦唱)嗔既然結姻緣、又何須置酒張筵。雖然那愛鈔的虔婆他可也難恕免、爭奈我心堅石穿、准備着從良棄賤。我則索你個正腔錢、省了你那買閒錢」(鄭元和がいう)私が多めにお金を用意して、お母さんに差し上げれ

ば、きつと許してくださいでしょう。(李娃が歌う) 私たちはもう結婚したので、宴会をする必要はありません。あの金を愛するやり手婆の怒りから逃れ難くとも、如何せん私の心は堅く石をも穿つほどですから、落籍の準備をしましょう。私はあなたの身請けの金は要りますが、遊ぶ金は切り詰めます。)と

¹⁰ 『元曲選』では「那」の字が省略される。

¹¹ 注一、大木康論文の記述。